

繭（まゆ）

あなたの思い出が  
わたしの掌（てのひら）からも眼からもあふれてきたら  
この点々と陽が射す  
明るい黄色のカナダ楓（かえで）の森で  
わたしはしっかりと両の膝を抱きかかえ  
涙で銀の糸をつむいでは  
繭をつくろう

殻のなかであなたの微笑がこだまして  
さらさら揺れてひびが入ったら  
わたしはまっすぐに芽を出して  
派手な朱鷺（とき）色の花を咲かそう  
その日一日日暮れまで  
あなたは至福につつまれる

闇とともにあなたに謎が落ちてくる  
だれ  
誰  
それは誰？

空の繭  
それは何？



## 駒鳥の夢

知ってる？

今朝きみの夢を見たんだ

外は白く霜のおりた生垣に

赤い胸の駒鳥が訪れ

わたしは暖かいふとんのなかで

うとうととまどろんでいた

きみはラジオでしゃべってた

ああ きみの声だ

もうじきここへ来るんだ

いっしょに出かけるから

そう思っって眼を覚まして

茶色いセーターに琥珀（こはく）の耳飾りをつけたら

きみが来ていた

わたしの育った明るくて古い木の部屋だった

すると

きみにこの夢のことを語りたいたいなと思

でも口に出すことはないだろうと しづかに泣いたのは

いったいいつの夢だったのだろうか？

きみも

わたしの夢をみることがあるんだろうか

わたしに語らぬままに

そして白く凍った池の底に

夢をみんな閉じこめるんだろうか

それとも

ハープシコードの音にのせて

町中の通りに響きわたるように

高らかに歌いあげるんだろうか

それとも

わたしが逝（い）ったあと  
糸のような三日月の晩  
夢でわたしに逢って  
ひとりむせび泣くのだろうか

知ってる？

きみのことを想っては

告げなかったことが

こんなにかくさんあるんだよ？

堇（すみれ）

きみの悲しみを一粒  
わたしに分けてごらん  
土に植えて  
三株の可憐なすみれの花に  
育てあげよう

きみの喜びをひとかけら  
わたしに投げてごらん  
白い五弁のばらの花を咲かそう

きみの絶望を丸ごと  
わたしに手渡すがいい  
両腕にぎっしりと抱きしめて  
わたしは湖の底に沈もう

小さな魚たちがわたしと絶望をつつき  
きみは一点の曇りなく  
最後の日まで輝くだろう



木犀（もくせい）

つま先あがりの坂をのぼっておいで  
ゆるい角を曲がったら  
貴美子の生垣が見える

ゆっくり近づいてごらん  
橙（だいだい）色の花の悩ましい香りが  
きみを包むよ

庭へお入り  
そして貴美子が  
低い豊かな声で  
きみが生まれるよりずっと前の 古いふるい唄を  
きみの知らないことばで唄うのを  
眼を閉じて聴くがいい

夢うつつのうちに  
木犀の甘ったるい香りが  
きみの頭全部、いちばん後ろまで満ちたら  
まぶたを開けるんだ  
すると初めに見たものが  
きみの心に一生棲（す）みつく

貴美子の瞳

緑の小径（こみち）

草原をぬけ 種をスカートにつけ  
あなたのいえの門まで歩いて行こう  
かたわらの池では子鴨（こがも）が泳ぎ  
親鴨は木陰でうたた寝をしている

楓（かえで）の緑の種（プロペラ）が  
そこにもここにも垂れさがり  
つばめがはしこく飛びすぎるなかを  
あなたの扉までわたしは進む

もしもあなたがいなければ  
あなたが握るまるい真鍮（しんちゆう）のどつてに  
ひとつ接吻をのこしていこう

そうしたら今度は  
あなたがやってくる

浅い池の上で 枝垂れ柳が揺れるそばをとおり  
一列に並んだどんぐりの樹が  
掌のように葉を振る道をたどって

棘（とげ）だらけの野ばらの藪で  
あなたはわたしのために 白い花を摘みとるだろう  
指先からの血で 白いシャツに染みをこしらえながら

あなたは来るだろう  
わたしの微笑みに逢うために

花火

冷たい夜気に

星座は輝き

色とりどりの豆電球が枝を飾る

十二時

ここであそこで

火薬が炸裂する

火の花を空に咲かす！

ぼくの傍にきみはいない

だけど必ずどこかで

この夜空を見ているだろう

だからそっと闇につぶやく

新年おめでとう

紋白蝶

あでやかな凌霄花（のうぜんかずら）を見ながら  
何を考えているのかと問われれば

きみの唇だと答えざるを得ない

柔らかで

熱く

ぼくを溶かしてしまふ

きみの唇

誇り高くつんつんと咲く白い泰山木（たいざんぼく）の下で  
何が欲しいかと聞かれたら

それはきみの腕

ぼくを抱きしめ

しなやかにからめとり

離すまいとするきみの腕

からみあう二羽の紋白蝶のように

きみと戯りたい

そんなことばかり考えているのかと笑われたら

どうもそうらしいと照れるよりない

空が熱い



霧の樹

わたしと接吻をかわしても

空は落ちてこなかった

わたしの肩にきみが手をのばしても

雨が地から上ってはこなかった

だから

わたしの熱いからだをさまよっても

白い霧のなかに枝をさしひろげた樹々は

踊りださないだろう

そのかわり

生命あることを祝福するためなら

冬のさなかに黒つぐみは唄い始めるかもしれない

きみの人生に幸あれと

霜の朝にりんごは白い花卉を開くかもしれない

わたしは今ここにいるよ

抱きしめるなら今しかないよ

明日のことは誰にもわからないから

真夏の雪が全てを凍らせるかもしれないから

唄うのは今だよ

永遠の今だよ

おいでよ！

銀色の貂（てん）

何に姿を変えて行ったら  
きみは部屋に入れてくれるだろうか

赤胸の駒鳥なら  
窓を開けてくれるかもしれない  
きみのためにせいっぱい歌おう  
でもたぶん  
なぜ迷いこんだのかときみはいぶかって  
親切にも窓から出そうとしてくれるだろう

きみは犬好きだから  
二色のダルメシアンがいいかもしれない  
きみはわたしの頭や背を撫でてくれるだろう  
わたしがとびついても嫌がらず  
頬をぺろりと舐められても 笑ってすませるかもしれない  
ひよっとしたら  
よしよしとわたしの胴に腕をまわして  
抱きしめてくれるかもしれない

だけどそれまでだ

でも もしも  
きれいな銀色の毛皮の貂なら  
きみのベッドまで忍びこんでも  
あきれて  
見とれて  
止めるのを忘れないだろうか  
そしてそこでわたしは丸くなって  
じゃましないで というふう  
に  
眠りこんでしまうのだ

満月がでて

わたしが元の姿に戻っても  
きみはまじないにだまされて  
円卓の騎士ランスロットがエレインと睦みあったように

わたしと契る  
翌朝また銀色に輝く獣を見て  
きみは夢かうつつかと思うだろう

呪文よ  
とけるな

かもめ

石の潮騒を聴きながら  
白い筋のはいった  
丸くなめらかな小石を集める

曇り空のしたの鮮やかな水平線  
蒼く濁った海

その深みに  
まだ来ない  
あなたとの夜が眠る

あなたの唇も腕も  
ゆびも

胸も  
腿も

優しく熱いだろう

永遠に来ないかもしれない  
その夜が  
静かな海に眠る

少年は水面に石を投げ  
少女はひいてはよせる波と戯れる  
かもめは何羽共にいても  
一人ひとり海を眺めている

まだ来ない  
あなたとの夜が眠る海を

仮定

きみと暮らしたかった

平和な生活ではなかったかもしれない  
言い争い

不機嫌

すれちがい

砂まじりの風が家の中に吹き荒れたかもしれない

でも一緒にいたかった  
もつと

もつと長く

もつと近く

きみの時間がわたしの時間で  
わたしの人生がきみの人生であるように

緑にそよぐ栃の木の陰を

ふたりで歩くように

薄紫のあやめが陽に透けるのを

ふたりで眺めているように

二つは選べない

棘（とげ）

あなたが来ると言ったから  
庭のばらを切つて  
首の細い壺にさし  
まるい小さな卓に置いた

だのにあなたは来ない  
冬が来る前の  
最後のばらだったのに

花びらをむしり葉をむしり  
棘だけがのこる茎を  
あなたに送りつけようか



嫉妬（沙羅「さら」）

夏椿の白い花のそばで

俺を抱きしめ

俺の唇がおいしいと

一番甘いとささやく

いつの

誰と比べている？

爪

おまえにもう一つ声が必要なら  
俺は自分の声帯をやる

新しい視界が必要なら  
俺の角膜を贈る

脚（あし）だろうが

脊椎だろうが

心臓だろうが

もしもおまえの中に生きられるなら

俺は迷わない

なんだっておまえにさしだす

そして俺は知っている

たとえ爪一枚たりとも

おまえは俺からは受けとらない

月

今度おまえに逢えば  
たぶんそれが最後になる

そうしたら僕はその後  
いったい何をあてに生きていけばよいのだろう

おまえに逢う前も  
逢ったあとも

月は円（まる）く輝き  
池のおもてのさざ波は  
月光にきらめく

けれど僕の心の月は落ちて  
二度とのぼってきはしない

ああ月よ  
僕の月よ

闇を照らす月よ  
おまえのいない闇を歩いていけというのか  
歩いていけるといいうのか

雨

晴れた青空の数ほど  
きみを愛した

傘に落ちる雨音の数ほど  
きみを疑った

風にそよぐにせアカシアの葉の数ほど  
きみの傍の  
見えない誰かに心を焼いた

強い八月の日光の数ほど  
きみの心にぼくがないことを知った

愛することは  
四月の陽を浴びて立つほど簡単で

きみの冷たい声に打ちひしがれるのは  
十一月の雨に叩かれるより易しい

もう  
きみが見えない

小石

待ッテル

キミヲ待ッテル

アオイ空ノ下デキミヲ待ッテル

ダカラ君ハ来ル

ネ？

ケレドキミハ来ナカッタ

待ッテ待ッテ

待チ疲レタワタシハ石ニナッテシマッタ  
硬クテ丸イ 小サナ石ニ

キミガ来タラ蹴トバシテシマウダロウ  
ソシテワタシハ見ツカラナイ

デモ

モシモ君ガワタシノ名ヲ呼ベバ  
石カラ元ノ姿ニ戻レルカモシレナイ

ソシテズット君ガ来ナケレバ

風ノ中デ石ハ壊レ

砂ニナッテ飛ンデイツテシマウダロウ

来テ

待ッテルカラ

来テ

傍観者（山茶花「さざんか」）

きみに

紅（あか）い帽子を贈りたかった

きみの笑顔の上ののっかる

ふかふかの丸い帽子を

どんな赤がきみに似合ったろう？

生け垣の山茶花なら可憐な紅

藪椿（やぶつばき）の朱はきりりと艶めいて

シクラメンの紅なら華やかな地中海の香り

つき返されるのが恐くて

買えなかった

怪訝（けげん）な眼をされたらと思うと

言いだせなかった

山茶花の紅がいちばん似合っただろうか

今年も咲いてる



紫陽花（あじさい）

知っていますか  
この世のすべてに  
終わりがあること  
あなたの命もわたしの命も  
いずれは尽きる

だから  
その前に

空の色を吸いとった大輪のあじさいを  
胸いっぱい抱きすくめ

古い椎の木下闇（このしたやみ）に身をひそめ  
梔子（くちなし）の白い花を踏みしだき

風を呼び

呪文をとなえ

あなたのもとへ瞬間移動（テレポート）しよう

わたしの腕のあじさいは消え

かわりにわたしは

あなたの腕の中

あじさいの空色が日に焼けて変わる その前に

あじさいよ

わたしに力を貸しておくれ



石像

毎夕

その日の彫刻を終えるたび

彼女は池から涙を両掌ですくい

かれの偶像を削りだした石の粉を 洗い流した

痩せたほほの両側を流れ落ちる

すこしきめの荒い髪

ひいでた額

静かな眼

そしておだやかに閉じた薄い唇

彼女が偶像を洗うたび

その幻影が色濃くなっていく

完成したら

彼女は石像を池に沈めるだろう

深く

ふかく

周りに積んだ小石は

彼の心の池に投げようとして

でもついに口から出ることのなかった

彼女のことばや唄の数々

ささやけ

響け

かれの石像に

猫

左から右へと  
通りを足早に横切りながら  
白と黒の猫が  
つと立ち止まった

そして占い師のような威厳で  
彼の眼をまっすぐに見据えた  
託宣を告げるために

時は来た  
十五年にもわたり  
おまえを一顧だにしなかった  
あの女人を忘れ  
重荷を下ろし  
眠りにつけと

そして猫は  
歩き去っていった  
なにごともなかったように

松の樹

森から声がした  
涙の枯れた彼女の名を呼ぶ声が

さぐりあててみれば

それは森の奥の空き地の傍（かたわ）らの  
老いた松の樹

疲れた背をもたせかけた彼女に

ごつごつの皮越しのささやきが聞こえてきた

——ここへおいで

わたしと一緒に暮らさないか

女は幹へと溶けこんで

二人は夫婦になった

夫がかつて囚（とら）われた

前妻の誘惑の昔語りをききながら

老いた根から彼女は滋養を吸い取り

陽の光を浴びて葉を茂らせた

何度めの春を迎えたあとだったろう？

老夫の声がいつのまにかしなくなった

彼女はひとり

枯れ葉を踏む足音に目を向ければ

いつかの彼女のように

そぞろ歩きする影

白いものの混じる髪に眼の下をたるませた男には

かつて彼女をはねつけたおもかげ

梢をゆらしそつと風を送ってやろう

かたわらの少年の髪がそよいだ

——呼んでみよう

季節が過ぎて

少年が

想い人と同じ広い額と細い鼻の少年が  
彼女の声を聞いた

——ここへおいで

わたしと一緒に暮らそう

そして女は

想い人の息子と

一つになった

四十雀（しじゅうから）

恋を失い命が尽きて  
女は

鳥にわが身を変えた

ちいさな一羽の四十雀に

そしてあなたの窓に飛んでいき  
色の淡いあなたの瞳を  
小首を傾げのぞきこむ  
——それは彼女の癖だった

もしも ジ ジ チュイルリ ジ との轉（さえず）りに  
あなたが耳を傾けるなら  
それは一度もあなたを貫かなかった  
彼女の恋の歌（セレナーデ）

もしも灰色のきやしゃな翼を  
あなたが丸い親指で二度撫ぜるなら  
それは彼女を爪先立ちで回らせ続けた  
火のように熱い夢

羽毛（はね）の頬に流れる冷たい涙を  
もしもあなたが掌（てのひら）に受けるなら  
涙は暗い色の石に変わる  
それは彼女の最後の鼓動

時を超え  
何千キロを越え  
あなたのもとへ飛ぶだろう  
ただ一度

どんぐりの木

どうしてもと奥まで  
この森をさまよい歩き  
一本の細いどんぐりの木に  
姿を変えない？

そうしたら  
もう二度とあなたに逢えない悲しみを  
切りつける寒風や暖かなそよ風のなかに  
少しずつ吐きだしてしまいうことが出来るだろうか

するとその風に魅せられて  
石の卵ばかり産む  
はにかみ屋のみそさざいや  
やかまし屋のかけすが集まってくるだろう

そうして秋が来るたびに  
りすや野ねずみや枯葉のうえに  
ぽとぽとと乾いた実を落としていけば  
あなたに拒まれた暗黒が  
いずれは忘れられるだろうか



それとも  
幾十年のち  
どんぐりの樹が枯れて倒れたとき  
獣たちは  
朽ちた幹の芯に  
あなたへの想いが凝固（かた）まってできた  
黄色い宝石を見つつけるだろうか？

枝垂（しだれ）桜

この想いを断ち切ろう  
と男が決心した日  
一本の桜の樹が  
満開だった

樹を見あげ  
かすかに揺れている  
何千もの薄桃色の花びらの下に  
むくわれなかった恋を埋めていいかと尋ねると  
桜の樹は  
一番長い指で男の左の頬をそつと撫ぜ  
いいよと言った

男はむきだしの指と爪で穴を掘り  
痩せた肋骨のあいだから  
傷んだ心臓を  
音きしませてひきずりだした

穴の底にそつと置く  
黒い土がくぼみを埋めた

どこか遠くで  
何も知らない想われ人が  
ふと微笑み  
歩き去っていく

春の雨がふり始めた  
新しい墓を  
寛大な樹を  
虚ろな胸の男を  
静かにぬらす

愚かものの夢

愚かな女は夢を見る

灰色の空の下

木枯らしにはだかの枝がカタカタと音をたてるなか

満開の染井吉野の

何千という薄紅の花びらを

愚かな女は夢を見る

未来永劫 おこるはずのないことを

もう一度

愛した人に逢えるときを

そのひとが

あの花のような微笑みを

彼女に投げる瞬間を

小さな花びらが舞い落ちる 降りしきる

音もなく

女のからだは冷えていく

夢を見ながら凍っていく

水仙

櫛の木が七度芽吹いて葉を散らした後も  
わたしには

あなたが振りはらう虫ほどの重みもない

一つ空の下にいなながら

わたしたちを照らしているのは別々の太陽

同じ土の上においても

わたしたちが吸っているのは それぞれちがう名前の空気

水仙が黄色い花をゆらすとき

わたしのほほえみは

あなたにとって踏みじる草の葉一枚ほどの輝きもない

カーディナルが高らかに鳴き誇るとき

わたしのことばは

風に揺れる梢のざわめきよりも

あなたの耳には意味がない

わたしには

あなたが振りはらう小虫ほどの重みもない

小虫ほども

花束

白いはなみずきの花を百輪

浩太に贈ろう

腕と脚に貼りつけて

村のどの塔よりも高く

舞いあがれるように

ゆったりとしたつむじ風をひとつ

浩太に吹いてやろう

小さな谷の村のうえをずっと回れるように

薄紫のリラの花束を十(とう) 浩太に届けよう

最初の花束は

彼女が眠る黒い急な屋根に撒(ま)き散らすように

二つめの花束は 彼女が働くバターの薰り高いパン屋に

三つめは初めて浩太が彼女の笑い声を聴いた狭い舗道に

それから一度だけふたりで行った曲がりくねった山道に

次は彼女が最後に浩太の静脈を指でなぞった 木苺の藪の傍に

そして彼女のことばが浩太の喉を刺し貫いた暗い淵の傍へ

七つめは彼女がしゃべるのを拒んだ楡(にれ)の茂みの下へ

もうひとつは彼女のスカートが歩き去るのを見送った風の原へ

九つめは彼女が背を丸めてしゃがんでいた 陽のふるあやめの

庭へ

浩太に告げよう

最後のリラは全力で投げるのだ

彼女が去った方角へと

放てリラを

渾身の力をこめて

彼女の足元へ

放て

海棠（かいどう）

花盛りの大きな海棠の樹を一本

見つけてこよう

その小枝も大枝も

花のついている限り折りとるのだ

艶のいいきれいな木の棺をひとつ

都合してこよう

まずは底に華やかな小枝を敷きつめて

ほの甘い香りで麻酔にかけた

あの男の暖かいからだを横たえる

そして隙間すきまに

真っ白に開いた花を七百数え

それから薄桃色の開きかけの花を二百と

鮮やかな紅の硬い蕾を四十九いれて

ふちまで柩（ひつぎ）を埋めつくす

彼の蒼白く閉じられたまぶたに

あたしのとっておきの笑顔と

自慢の細い足首がくるくる回っている眺めを吹きこみ

彼の小さな耳には

あたしの足音と

祭で喝采（かっさい）をあびた唄声をぼとぼと落とそう

そのあとで男を

冷凍催眠にかけてしまおう

あたしが死んだ三十年後に目覚めるように

眼を開けても

もうあたしを覚えているものは誰もいない

ただ彼ひとり

あたしの思い出にむせかえる

檻（おり）

きみのためにわざわざあつらえた檻は  
きみの気に入るはずだった  
金棒（かなぼう）はあいだが離れているから陽がさしこむ  
そよ風はきみの頬をくすぐる  
雨粒だってきみの腕をすべり落ちる  
そのうえ食事は特製だし見張りは唄うたいだ

けれどきみは満足じゃなかったんだ  
檻の横の縦（もみ）の樹とつる豆の芽に  
きみはわたしに話しかけるよりも  
もっと甘くもっと熱っぽく  
囁（ささや）きつづけたにちがいない  
枝を垂らしつるを伸ばして 檻をまるきり隠してしまうように

きみは狸と穴熊に呼びかけて  
わたしには決してしなかったように  
そのごわごわの背や腹や鼻づらを撫ぜ  
わたしがきみのために料理（つく）った食べものをわけてやり  
穴を掘らせた

そしてわたしを知らずに魅了してしまったように  
わたしに見張りを命じられた駒鳥を  
何の苦もなく誘惑したのだろうか？  
だからあの赤胸の小鳥は  
きみがいなくなつた後も変わらぬ唄を唄い続けた

きみのからだを捕えたと  
愚かにもわたしは安心していただけなのに  
きみは行ってしまった 去ってしまった  
空っぽの檻と  
からっぽのわたしをただ残し



使者たち

茶色いふわふわの子鴨（こがも）、休まない漕ぎ手よ  
おまえが日に百キロ動き回れるようになるまで  
ここらで一番の小麦と大麦を食べさせてやろう  
だから

一条の日光のように棲み家から逃げ出したあの男を  
水中も地上も空からも探しに行け

何でも見たがる縞りす、素早い走り手  
五週間毎日おまえの頬袋が十度ふくれるほど  
どんぐりと胡桃とはしばみの実を持ってきてやろう  
だから

壇（びん）洗いのブラシのような尻尾にわたしのルビーの指輪を  
さして

あの男のもとへ走れ 運命を聞かせに

緑にぬめる殿様蛙 ちいさな哲学者

おまえを蛇からも鳥からもこどもたちからも護（まも）ってやろ  
う

ぶんぶん飛び回るおいしい小虫と結婚相手も連れてこよう  
だから

北の森の紫きので操って

びよんびよんわたしのもとへあの男を連れておいで

たおやかな青鷺（あおさぎ）、長い嘴（くちばし）の狩人よ  
丸々肥った魚と田螺（たにし）とざりがにの沼へおまえを案内し  
よう

だから彼の首の動脈をまちがいなく突き刺しておくれ  
からだ中の血が頭からわたしにふりかかるように

黒光りする飢え鴉、生まれながらの屍肉（しにく）喰い  
とびきりの晩餐におまえを招待しよう

彼の屍（しかばね）を眼玉から爪先までつつき喰らうがいい  
けれどしなやかにきらめく髪と白い大腿骨だけは残しておくれ  
わたしが両の腕（かいな）に抱いて眠り

彼の赤子を孕（はら）めるように

大鴉（おおがらす）

男が自分で気がつくより先に  
誰の眼が 彼の昼も夜も奪ってしまったか  
大鴉は知っていた  
なぜなら  
彼がしゃがれた声でつぶやき続けるのは  
陽を浴びる桜の幹の色をした 透子（とうこ）の瞳のことだけだ  
ったから

あやういところで

男は大鴉に

彼を見つめたことのない 透子の瞳を突き刺せと

言いつけてしまうところだった

ふみとどまったのは

唇をひらくその寸前に

雌のひたきの羽と同じ色の透子の瞳が

彼を狂わせたことに気がついたから

だのに大鴉は

無言の指図を読み

考えこんでしまった

林を流れる小川の底の色をした 透子の瞳に

この生きものも魅せられてしまっていたのだ

だから

大鴉は自分の漆黒の瞳を娘にやり

自分は盲（めしい）となって

命令者のもとへはばたいて帰った

嘴（くちばし）のあいだに

世にも美しいふたつの眼玉をはさんで

魚

丸石の浜から  
海草の揺れる浅い湾へと  
男と女が船を出した

白髪の女は  
針のついた糸をおろし  
三十年前に落とした骨の  
残骸をさがす

夫を裏切って  
流産した娘の小さな包みを

もの言わぬ若い男は  
砂底を網で引きずって  
ごつごつの石が

誰にもひきあげられていないかを確認する

五週間前に彼が沈めた  
女房のきれいな足首にくくりつけた石を

釣りあげられた黒と白の縞（しま）の魚は  
空中で喘（あえ）ぐとき  
罪をひときれ吐きだしながら  
おんなの皺（しわ）だらけの掌から  
同じくらいの悲嘆を  
こそぎとっていく

かれの虹色の鱗（うろこ）のさかなは  
喜びに口笛を吹きながら  
男のこけた頬から  
歪んだ欲望をもうひとかけら  
かじりとる

町のにんげんが魚を買う  
もぐもぐ食べては

身をふとらせる

野の林檎（りんご）

邪悪な生きものの中で  
自分の犯した罪を  
ひとつでも  
ふたつでも認めるものは  
足枷（あしかせ）をひきずり  
列をなして  
秋の森へと入り  
それぞれのところを選び  
樹に姿を変える

愛と憎しみ  
欲望と裏切りでできた  
ごつごつした塊（かたまり）から根を生やし  
罪人どもは雪の下に凍える  
春が来て  
さしのべた枝に  
この世で一番白く 清い花を  
つけることが許されるまで

二年

あるいは十五年  
それとも四十年後  
すべての罪業が白い花卉に溶（と）けさるとき  
樹々は  
年老いて醜い人の姿をとり戻す

終身刑を受けたものは  
くる年くる年  
くる春もくる春も  
白い花を咲かせ続ける  
酸っぱい実をみのらせ  
罪の種をまきながら

冬の月

降誕祭（クリスマス）の二日前  
たえない強風が  
空中に漂う土やほこり　ちりを全部  
吹き飛ばした

一年で一番長い透明な暗闇を  
満月が  
照らす

空の一番の高みから  
樹や  
切り株や  
藪や  
廃墟の影まで  
みんな照らし  
しろい光で呼びかける

ちぢこまってかがんでいる  
すべての逃げ出したもの  
迷いさまよい歩くもの  
暗い思いに負けたものたちに

安らかに休んで  
おおらかな夢を見てもよいところへの  
道筋を教えるために

幸運にも光がとどいた亡霊どもは  
背と脚をぎくしゃくと伸ばし  
泪の枯れたうつろな眼で  
よろめき歩き  
それぞれに小さなちいさな墓を探し出し  
最後の眠りにつく

そして  
月のひかりが墓をとかす

つばめ

きみがどこに住んでいるのかわかる前に

きみの部屋に持って行けたら

と願っていた薔薇は

咲いて

散ってしまった

今度いつ逢える？と

きみがぼくに一度も聞くことのないうちに

毎日その匂いをかぐたび

きみのことを想わせた茉莉花（ジャスミン）の花は  
枯れてしまった

きみの名前を尋ねることができないでいるあいだに

きみはぼくに微笑まなくなった

あの

すいと来ては飛び去っていくつばめのように

どうして薔薇は花びらを散らす？

どうして茉莉花の花は枯れる？

どうしてつばめは飛んでいってしまおう？

遠いつばめ

きみが退く理由はわからない  
この次いつ逢えるのかもわからない

それでも好きだよ

今を盛りと咲く白薔薇を  
眺めているように

手の届かない遠い空を舞う  
つばめを仰ぐように

見えない山脈（アルプス）に  
積もる雪を想うように

きみが好きだよ

ずっとずっと好きだよ

たんぽぽ

来年の春

わたしはここにいない

だから

あなたが教えてくれた道から見える

畑のふちに一列に並ぶ樹に

わたしは頼んでおいた

一年たって

また春の風がそよぎ始めたら

梢のやさしいざわめきといっしょに

わたしの唄声（ハミング）をあなたの耳に届けるようにと

それからまた

道端の眼に沁みる青い草と黄色いたんぽぽにも

よくよく頼んでおいた

四月の太陽が輝いたら

わたしの笑顔を

必ずあなたに思いださせてくれと

りんごの白い花びら わたしの涙

枝垂れ柳はわたしの指先

ひわの唄よ わたしの囁（ささや）き

濃い八重桜はわたしの弾む笑い声

わたしはあなたを忘れない



針槐（はりえんじゅ）

また逢えるよ  
と わたしの眼をじっと見ながら  
あなたが言う

南へ渡る燕が

海を越え

この軒にまた巢をかけるように

六月になれば

道に沿った針槐（はりえんじゅ）が

また甘い香りでわたしを抱きすくめるように

この小川の水のこの一粒が

海へ流れ

空へ昇り

雨となってまたここへ戻ってくるように

それとも

この花壇中の白ばらが

悉（ことごと）く黄のばらに変わる

その日に

また

逢えるよ……